

## 4. 訓練適応性検査を能力再開発訓練に適用する効用について

訓練適応性検査を実際の能力再開発訓練に適用してみると、全体的にみて、能力再開発訓練をよりよくする有効な手段の一つになることがわかった。

この試みに関与した、訓練生ならびに検査を実施した共同研究者である担当の指導員は、この訓練適応性検査の適用の試みに積極的にかかわってくれ、この試みが十分に意義があると述べている。

まず、訓練適応性検査を受けた訓練生からは、検査実施後の感想を次のように述べているので紹介しよう。

### 4-1. 能開訓練生から訓練適応性検査実施に関する感想

まず、検査実施後の訓練生の2～3の生の声をのせてみよう。

訓練生は検査終了後、一様にホッと一息ついた後で、ある人は汗をひかせながらも感想を述べている。

#### 事例1. Y・K氏（56歳）

「やった。思ったより、けっこうできるものですね。アークが発生しない時は、どうなるかと心配でした。これで溶接の仕事がどういうことをするのかわかりました。

検査を受けるというので、緊張しましたがエンピツでやるテストよりも、ずっとおもしろい。一生懸命がんばります。」

#### 事例2. T・Y氏（17歳）

「夢中でやった。終わった。けっこうおもしろい。」

#### 事例3. Y・N氏（37歳）

「ホッとした。息をつめていた。溶接が曲らないように注意した。思ったより出来たから80点。これで、メシを食って行かなくちゃ。」

事例からもわかるように、訓練適応性検査を受けて良かったという訓練適応性検査に関する感想と、溶接作業の困難さについての感想が主として述べられている。

そこで、これらの感想を次のように整理してみよう。

#### ① 訓練適応性検査の意義について

- 1) 紙筆検査とは違い、実際の作業をやるので抵抗が少ない。

- 2) 従来のテストは、正誤の判定は自分ではわからないが、課題を製作することで自己評価がしやすくなる。
- 3) 面接などでは、気やすく話しかけることなどは難かしいが、作業を教えてもらうことによって、ちょっとした質問ができるし、親しみがもてる。
- 4) 訓練導入時の段階で、検査を通じて、その科の担当指導員以外の先生とも知りあいになれば、訓練生からもコミュニケーションがとりやすくなる。
- 5) 溶接とは何をするのかがはっきりわかるし、訓練目標がはっきりするので、動機づけが強くなる。

② 溶接作業そのものについて

- 1) アークの発生がなかなかうまくいかない。
- 2) アークの先が見えず、溶けている状態がわからなかった。
- 3) 仮付溶接で溶接棒が長いため、ねらい位置が安定せず、動揺した。
- 4) 仮付溶接で、左右が逆になっていることに気づかなかった。
- 5) 溶接ビードが曲がらないよう気をつけたが、曲がってしまった。

さらに、指導する側からは訓練適応性検査の能力再開発訓練課程への適用の効用について、次のような感想がよせられている。

4-2. 指導する側からの訓練適応性検査実施に関する意見

訓練適応性検査の課題作成から、テスト実施、さらに訓練成績の評価までの全過程にかかわっている担当指導員の生の会話をまず、のせてみよう。

「はっきり言うと、指導員のためのテストですね。今まで主観的に判断していたものが、客観的にみられるようになった。それと、自分が今まで何をやってきたのか、そのまま出ちゃいますネ。」 (S・H先生)

「そうですね。訓練適応性検査を実施することで、溶接の技能要素とは何か。訓練で何が欠けているのかを真剣に考えだした。今までのカリキュラム・パターンでいいのかとか。その技能要素を教育するためのもっと良い訓練課題があるんじゃないかとか。溶接作業をやらなくとも、その技能を習得するのは、他の課題でもやれるんじゃないかとかね。

そういう視点から技能訓練を考えないと現状で求められる技能者は育成できないんじゃないかな。」 (S・K先生)

これらの生の声を集めて、整理すると、訓練適応性検査実施の効用は次の3点に整理できるだろう。

- ① 指導員の訓練への取り組み方に対する意識の変革につながる。
  - ② 訓練導入時から指導内容を吟味し、各訓練生用の指導案を考えるようになる。
  - ③ チームによる統一した指導方針の検討が可能になり、指導レベルが向上する。
- これら3点について詳細に説明する。

- ① 指導員の訓練への取り組み方に対する意識の変革につながる。

まず、第一に担当の指導員が、今まで訓練をどのように考えていたのか、訓練生を単にできるかできないかで判断するだけでどう指導したのかとか、溶接のポイントとなる技能をあやふやに考えていたことなどに気づき、それを是正しようとする動きがみられるようになった。

第二に、技能診断の視点が変わってくるのがよくわかった。溶接技能要素とは何かを考え、従来の主観的な判断にもとづく旧来型の指導から脱皮し、より客観的分析的な視点からの指導を求め出した。

第三に、訓練生を個人レベルでとらえるようになってきた。その訓練生のパーソナリティの特徴についても考慮し、技能ではどの部分が欠けているから、こう指導しようというような教育的な配慮からの指導が中心となってきた。その例として、製図などでも5問の出題中1問しかできなくとも、ダメとは考えないで、どこをどのように指導すれば、うまく出来るようになるか、といった指導方法などにも考えがおよび、訓練生個人の欠点の修正にとり組もうという態度が強くなる。

- ② 訓練導入時から指導内容を吟味し、各訓練生用の指導案を考えるようになる。

まず、第一に訓練適応性検査を導入時に実施すると、訓練生の個人特性が訓練の最初に情報として得られるので、従来から比べて、最初の訓練から指導がしやすくなる。

第二に、訓練導入時に実施して、欠点の修正案を考慮することによって、従来では訓練の後の段階でわかった欠点が時間的にも修正可能となる。例えば、溶接作業はうまいが図面は読めないといったケースでも、初期にわかれば対策も可能となる。さらに、従来のカリキュラムパターンに拘束されることなく、溶接の技能要素を習得するために必要ならば、溶接作業でなく、他の課題を実施し、その技能習得をさせるという発想も生まれる。

第三に、短期訓練において、組織的実践的面接法ともいわれる訓練適応性検査の実施によって、その科全体でどのような指導を訓練生に展開すればよいか。その具体的方法を個人別に計画することが可能となる。

③ チームによる統一した指導方針の検討が可能になり、指導レベルが向上する。

まず、第一に訓練適応性検査のデータを指導上のカルテとすることによって、指導員の間で訓練生に対する統一した理解、認識が得られるようになる。さらに、そのことによって、訓練生への統一した指導効果が得られる。

第二に、訓練適応性検査の結果をチームで検討することによって、技能診断における指導員の経験的レベル差をうめ、チーム全体のレベルが向上する。

第三に、訓練成績の評価面でも訓練適応性検査を実施し、評価内容をチームで検討することによって、主観的評価から客観的評価への変化がみられてくるなど指導レベルが向上する。

このように指導する側では、訓練適応性検査の適用によって、能力再開発訓練での指導をより教育的に実施して行くことに役立つとしている。

さらに加えれば、訓練適応性検査の実施は技能教育の原点であり、指導員の力量を高める最も良い課題であるといえる。また、訓練生の今後の指導に信頼関係が深まることにもなる。